

候、正直に点いたされ候ハ、三四会ハより可申候へと一会／＼に損立申候て会所より狂言を可頼候、狂言いたされ候ハそれをかきりニ俳諧の出会ハやむへし、狂言いたされす候ハそれをかきりニ前句ハやむへく候、しかれハ錢一貫か貳貫の事にて里紅一生之俳諧を失ひ候半事博奕よりハおとりて浅知のいたり、是其無用の第四ニ候、里紅ハ何と被存候哉、愚老か存念ハ蕉門の血脈を百世につたへ天下一人の宗匠ニ仕立候半と夜着ニ足つゝむ任弱をいましめ座一枚之乞食ならハせ愚老存命之間ハ馬かこをやめ足をすりこ木に天下をめくりて五十日後所帯をすへはしめて蕉門の宗匠と天下の人ニいハせ候半と今年ハ学文の世話をやき明年ハ明後年ハと日々夜々の里紅行するハ愚老か胸中に□□くミ置候、然ハニメ三メの錢もうけの沙汰ニハ有間敷候、是ハの無用の第五ニ候、此外無用ハ幾品も候へとも大むね是にて御察可被成候、乍去御連中をはしめ里紅とても今日御慰ニコそ俳諧はすれ左様に儒仏の大道とおなしくあら／＼むつかしの俳諧やおほし候ハ、幸に諷をしへを宗となされ俳諧ハ慰ミ可被成候しからハ愚老も無別条むかしの里紅にかハらす表向之御出会ハ可申候、此度の細銀ハ御一家も御連中も相談の上にて里紅一生の境界を定可申故にて候、愚老こそ左様ニ覺其元存外ニ思召候ハ、猫に俵をおふせ鼠をとらせむとにハ非すしかと相談御究候てとちらへも御返事可被成候人ハ始メ終と申事にて一生の思案今日定らぬ者ハ愚老ハ相手にハ不仕候、若し獅子門に籍をかけて俳諧可被成合点ニきハまり候ハ愚老か尻をぬくひ草履を御直し可被成候、それかいやにて候ハ、すみやかに今日御やめ可被成候、俳道に百□嶮崖ト申事ハこの一言を申にて候 穴賢

五月上旬

見龍（書判）

里紅丈

鷹仙丈

尚々琴左丈も御同志のよし此旨御伝可被下（虫損）諧可被成思召候ハ、此上の好事いか斗御推量可被成候、此旨童平有琴其外里紅御念比之衆中へも申触にて公表の埒に仕候、一生之決定ニ候ハさゝやき事にハ被成間敷候

7 『校註俳文学大系俳論篇』（昭5・1）410ページ。

8 同右、384ページ。

9 『有朋堂文庫風俗文選・和漢文操・鶉衣』（大7・9）541・542ページ。  
10 杉浦正一郎博士「九州蕉門俳諧史概説」（文学研究49輯・昭29・7）25ページ。

という行文からすれば、その年令の若さを理由として考えているようである。

支考の九州行脚の折、日田の釣壺が支考の言説を肯おうとしなかったことについて、支考の若さや術学性が理由として考えられている。<sup>註10</sup>

このような空気が周囲にあったとすればこれを克服するための行動を支考がとうとうするのは自然のことであろう。その行動は、自分の活動を天下に示し、諸方の連衆との俳交を、自己主張や批評を交えて誇示することになることが考えられる。

## 六

以上、『西華集』の編集形態の特色三点に着目して、その意図、原因を推察した。

解説を付した表合は、単に時宜の当用としての挨拶性にとどまらず、支考の個性的要素の参加を得つつ、啓蒙の意図をうかがわせ、地域別、連衆網羅の方式は、自ら言う後続の行脚俳人のためというのとは別に、支考の指導の意図が、かなりはつきりしている。廬元坊の『桃の首途』の場合を参照、類推し、支考における条件、状況を併せ考えれば、行脚が宗匠の修業の一方法であり、諸国連衆との俳交を天下に誇示する必要もあって、行脚そのものが、様式化され、演出されたものであって、その結果が、『西華集』のような形態となったものと考ええる。

支考の、元禄十一年の中国、九州筋の行脚の実態は、『梟日記』などにかがわれる以外には、なお不明の点が多いようである。本稿も、その点になお不満を残すものである。

『西華集』は、その作品や解説の内容についても当然問題とすべきものが乏しくないが、本稿は、その編集形態の特異性に興味を抱いた結果である。

註1 杉浦正一郎博士「俳人去来評伝」(『向井去来』昭29・4所収)288ページ。  
大内初夫氏「志太野坡」(明治書院版『俳句講座俳人評伝下』昭34・4所収91ページ)。

2 『校本芭蕉全集俳論篇』(昭41・7)所収。

3 『俳諧大辞典』(昭32・7)所収「表合」の項(尾形仇氏執筆)。

4 『俳人真蹟全集』第五卷(昭6・3)126ページ。

5 石田元季氏「俳文学考説」(昭13・5)所収。

6 大垣図書館蔵。『獅子老人一筆』と題する半紙本の写本。「獅子老人真筆」と題する里紅・鷹仙宛見龍(支考)書簡の写し・削かけの返事・嵐枝宛里紅簡書の写し・明治初期資料を収める。従って明治以降の写しであると思われる。判読の困難な部分や誤写などもありそうなものであるが、以下、支考書簡を紹介しておく。

### 獅子老人真筆

御状相達候然是里紅前句の事言語道断之無用と存候、其子細ハ我等前句いやにてはやらぬ様にいたし我まま申ちらし候得とも無是非人の為にいたし候、里紅ハ余程望にて何とそはやる様にして人の氣に入我為に可被致候へハ会所より頼まれ無点之句も長にし置つくり句も可有事ニ候、然者我等と里紅とハ天地之ちかひと可申候、是その無用之第一ニ候、我等意立附之点いたし候ても利用為ならぬハ天下の人被存候、里紅ハ哥仙之点料ニと錢百さられ候而も諸人あさむき可申候、其さかひハ三十年之徳二三年之徳とのちかひに候、是その無用之第二ニ候、里紅は去年より初て名をひろめ善悪未分之時ニ候所前句の變名ハ決定也、是その無用之第三ニ候、京江戸の前句柴屋の狂言にて千句も万句も名目斗にて御さ候、未ハ万句よせて被仰遣候事存外之不案ニ

意味を持つであろう。俳諧宗匠とはやはり俳諧を売る人の謂にはかならないからで、「蕉門の宗匠と天下の人にいはせ」ようという意図があれば、なおさらのことである。そのために、行脚の成果を宣揚するための行脚記念集の出版、そのことを予定した略式俳諧と発句群、そのために演出された行脚、廬元坊の場合も、またそれ以後の美濃派宗匠の場合もそういうものであったと思われる。

元禄十一年の支考の行脚の実態は、『梟日記』に誌すほか、ほとんど知るところがないので、推測の他ないが、さきに引用した松木左京他宛書簡によっても、経済的にもそれほど余裕のあるらしい感じはなく、また元禄十五年刊『花見車』の轍士の評によれば、

国々へかゝへられてひたといかんす、かづき着てあるかんす事もあり  
衣着てとおらんす事もあり、京江戸大坂のつき合一度もなし、いなか  
にて一はいづゝはさるゝやら、親かたへの手形はたひく<sup>註7</sup>

この記事が、どの程度支考の行脚の実態に対応するものであるか、たとえば、「国々へかゝへられて」というのは、字義通り、諸国の連衆の招請によると見るべきか、俳諧師を遊女になぞらえて評判した本書の趣向に従った行文かなど問題があり、この場合は、後者かと思われるが、「いなかにて」云々の箇所は、『花見車』巻一の、当代の俳諧宗匠や連衆の評判の条に見える。

近年桃青門人世にはびこり、諸国に頭陀往行して名山古蹟を見、または一筋をすすめてありくに、四五日もとめて、大廻しの切字はいかに、第三の字どまりはいかやうにする、恋の句一句にして捨るはいか

になどゝ伝受をかたらせ、昼は会に引出し、夜は鳥のなく迄ものかゝせなどして、べったりとくたびらかし、帰る時は集料句代ばかりさし出して此方より便状以てなどゝまぎらかして置也<sup>註8</sup>

などに対応するものであろうか、ともあれ、「親かた（原註Ⅱ井筒屋庄兵衛）への手形はたひく」とは、板元の井筒屋に経済的援助を仰いだものに相違なく、そのような状態で、あえて行脚を続けようとしたところに、さきに述べたような俳壇啓蒙の使命感も含めて、宗匠としての修練という意味が考えられるのではなからうか。

そして、支考を駆って、このような行脚に行かした一因は、芭蕉没後、元禄十年前後、支考が置かれた状況の中に見出されるかと思う。

支考の『和漢文操』巻七所収の「浪化公終焉記」に芭蕉と浪化が京都で対面した折のことを述べて、

そこなる法師こそ、くりからの坂も越ゆへけれと、おかしことに契り  
捨給へりしか

と記し、その註に、

法師とは東花先師なり、同く祖翁に具せられて越の行脚の約束ありし  
とぞ、按ずるに其比は先師も二十七八年にて有磯砥波の撰集にも先  
師の俳諧を疑ひ玉へばと去来より内談の断あり<sup>註9</sup>

と見える。芭蕉、浪化対面的一座に支考が居たかどうかについては、問題があるようであるが、註の部分には、おそらく支考没後の述懐として聞くべきであろう。『有磯海』などの刊行された元禄八年のころまでも浪化の信頼を得ていなかったことがうかがわれる。「二十七八年にて」

いま、廬元坊の行脚記念集を例にとって考えれば、廬元坊は、享保十二年に支考の勧めに従って北陸行脚を試み、その成果を『桃の首途』として刊行したが、その編集の形式は、各地における短歌行と「名録」としてかけられた発句群が、地域別に整然と配列されている。表合や短歌行は、さきに見たごとく形式の簡略さによって、当座の用をはたすものとすれば、これらを略式俳諧と呼ぶこともできるであろう。とすれば、『西華集』や『桃の首途』の形態は、略式俳諧プラス「名録」発句と、この両者の間に共通性を見出すことができるのではないかと考える。

この共通性は、①さきに述べたように、支考の『西華集』の行脚が、芭蕉の影をはなれた最初のものであったこと。廬元坊の旅も、俳壇への出発という意味で、両者が相似た状況にあったこと。②廬元坊の行脚活動、即ち撰集活動に、支考の強い指導力が働いているであろうこと。などを考え合せると、その根に支考の意図があって、その反映ではないかということを考えさせる。

支考は、『桃の首途』の序に  
享保のことし丁未の春、三越路の行脚をすすめて、合羽にわらちの足をかため、蒲団に木まぐらの耳をこらさんと、獅子庵の茶漬に首途を祝ふは、黄鸝園のあるし里紅なりけり。むかし我師の東くたりに祖父翁の旅の具として碁笥椀といふ物をはなむけにして、此心推せよ花に五器一具とは西行上人の心をつたへて世の人よかれ我を食せむとよめる風雅のさびをさとせしのみならで其師のその弟子にをしふる実情なり

(後略)

として、行脚のすすめに際して、「風雅のさび」をいうほか、「其師のその弟子にをしふる実情」というものを加えている。

「風雅のさび」を文学的な面であるとすれば、もうひとつの「師のその弟子にをしふる実情」とは何であろうか。「五器一具」の句などから考えて、私は、生活面のことかと考える。

大垣市立図書館蔵の写本『獅子老人一筆』<sup>註6</sup>に、「獅子老人真筆」と題する支考の里紅(廬元坊)・鷹仙宛書簡の写しがあり、中に行脚について

愚老が存念は、蕉門の血脈を百世につたへ、天下一人の宗匠に仕立候半と夜着に足つつむ、任弱<sup>マダカ</sup>をもいましめ、座一枚の乞食ならはせ、愚老か存命の間は馬かこをやめ、足をすりこ木に天下をめくりて五十己後所帯をすへ、はしめて蕉門の宗匠と天下の人にはせ候半と今年は学文の世話をやき、明年は明後年はと日々夜々の里紅行すゑは愚老か胸中に□□くみ置候

と述べており、支考が、後継者養成にはなはだ計画的、意図的であったことが知られるが、その中で宗匠として世帯をすえる準備、その前段階の修業として行脚を重視していた点が注目される。廬元坊里紅を『桃の首途』の旅に出したのも、そのような弟子への配慮からであろう。そこにはしかし、宗匠となるべき者の修業という意味のみならず、そのような者をひろく諸地域の連衆に知らしめるという役割も当然忘れられてはならないであろう。むしろ、そのことがあってはじめて、宗匠の修業が

のように支考のこの行脚には風雅をめぐる褒貶、即ち批評や議論をまことになう行動とする強い意識のあったことが知られる。この意識は、『続五論』の著とともに、『西華集』の表合と解説という形をとった編集形態に反映していると思われる。

右の意識を支えたものとして、支考の、批評や議論の面に長じた能力や好み、抽象的思考癖のごときものを無視できないかと思う。

すでに『笈日記』によれば、

去年の夏、阿叟の桃花坊におはす時、人々よりいて物語し侍るに、支考が集つくらば、なにがしの桐火桶に似せて侍らん、たとへば、

梅が香にのっと日の出る山路かな 翁

なまぐさし小なぎが上の鯢の腸

梅が香の朝日は余寒なるべし。小なぎの鯢のわたしは残暑なるべし。是を一眸の趣意と註し候半と申たれば、阿叟もいとよしとは申されし也

など記しており、作品に評註を加えて掲げるといふ『桐火桶』の方法を試みたいという希望があったわけであり、同書に、「今宵誰よし野の月も十六里」の句をあげ、

名月の佳章は三句侍りけるに、外の二章は評をくはへて後猿蓑に入集す。爰には記し侍らず、

としているように、『続猿蓑』には、

名月に麓の霧や田のくもり

はせを

名月の花かと見へて棉畠

の二句に評論を加えているのも、その実践なのであろう。

『西華集』の場合も、その個性的な能力の反映であることが、当然考慮されねばならない。

## 五

第三の問題、地域別配列は、表合については、一地域に連衆の多い所では、二つ以上の表合を作り、収載していることから推測すれば、連衆を網羅するという意図がうかがわれる。また発句の場合は、のちの元禄十四年刊『東西夜話』では、やはり地域別配列がなされているが、発句は特に「名録」の名目の下に配列されており、『西華集』には「名録」の名はないが、実質的には同じである。この「名録」というまとめ方、提示のし方にも、連衆、作者中心の編集方針がうかがわれる。この連衆網羅、地域別配列について、支考は、「此集に所をさため、部をたつる事は諸集に作者の名まきはし、その所にその作者有と行脚の人のしりやすからんため也」と説明しているが、これは、後続の行脚俳人のための意義のみで、支考自身にとっての意味は、うかがいにくい。それほどのようなものであったろうか。支考は、『西華集』のあと、同形式で京都以東の畿内、東海地方の連衆を収めた『東華集』を刊行しており、この両者による、広範囲にわたる連衆紹介は、単に後続の行脚俳人のためというのではなく、支考自身の俳壇へのかかわり方を示唆するものがあるのではないかと思われる。

ところで、このような形式、連衆網羅、地域別配列の形式は、廬元坊以下、代々の美濃派の宗匠の行脚記念集の形態として受けつがれている。

とあり、このような「始もなく終もなきやう」な風体、姿を今後の方向に見ているが、これは、「曲節おほき」姿の一つであって、その新風としての宣揚は、『伊勢新百韻』の刊行に見るべきであろう。このようなさまざまな作例の提示とその解説は、当代諸地方における表現の例として読まれるが、しかも当然、旅中の作品に付されたこの解説は、編著の上でのことではなかったはずで、行脚の途次、各地の表合の一座で、解説に見えるようなことを説いたものと思われる。後の北陸行脚における『東西夜話』に見られるような夜話が行われたであろうことは推察に難くない。現に『梟日記』の十月十二日の頃、「牡年亭夜話」は、姿情や不易流行の問題を論じて、当然ながら『西華集』の解説と同質の問題関心を示している。「牡年亭夜話」は稀な例で、『梟日記』にはいちいち記載はないが、「風雅の物語」は諸所において行われたであろう。

夜話——作例と解説——により構成された行脚で、支考のこの旅はあったし、その反映としての『西華集』の編集形態であったというべきであらう。

#### 四

支考自身のこの行脚についての意識がどのようなものであったかをうかがわねばならない。

『梟日記』の序にはまず、旅立ちに先立って伊勢神宮に参詣し、「この時の風雅のまこと」を祈ったが、その風雅は、「瘦藤に月をかかけ、破笠に雲をつつむというむかしの人のあとをまねびたるにはあらで」として、旅の契機としての風雅ともいべきものによるそれとは異なるこ

とをはっきりと述べている。そして、風雅のさびしさを自分の行脚姿に象徴させて、梟にたとえ、

#### 月華の梟と申す道心者

の句をかかげる。風雅の道心者として自ら任じているわけである。しかしすでに、風雅が細杖や破笠を伴とし、月や雲を友とするものではなかったのであるから、風雅の道心者といっても、自然などの関わり方において道心者を視ることはできない。

さらに序文には続いている。孔子が麒麟を見て『春秋』を著わしたと、その一字褒貶の書といわれることになぞらへて、俳諧師らしく梟にちなんで一書を著わし、『春秋』のように「世のためし」になるようにしたいのだが、風雅の道心者、梟になることは、まことに難く、岸のからすが魚をうかがう大望というべきであらうか。

『梟日記』の跋には、行脚後の支考の感想がうかがわれるが、そこで支考は、この行脚を「世の好悪にすめられて、その是非にあること二百余日」といい、その専ら好悪是非の渦中にあった行脚が、「風雅のまこと」にかなうものかどうかとの疑いを吐露しているが、『続五論』の跋にもまた、

此五論は西華坊が一字一涙也、あるは人をそしりあるは世をいきとほる、此論あるましくは先師遺誠の心にそむき三神風雅のにくみをかふむらん……此時の風雅のまことあらばあらそひはまことに風雅なるへし

として、風雅のためには、あらそいな辞さないという態度をとる。こ

(1)この表に神祇あり釈教あり恋無常をえらばず、名所をいひ人名を云事は一巻の始終を爰につつむるといふ心なるへし

(2)この表はよのつねの俳諧の手筋にあらず、おほくは言葉をたくみ、奇をもとめ今古の姿をえらはざる事は段篇おなしからんは見るものはなやかならず、はなやかならされは、人のこころにこりて句意さらにその中にかくれやすし、此ゆへにたた曲節おほきのみ、しるてはこのむましきと也

まず通常の連句の表には許されない神祇、釈教以下のものを自由に入れる。それは一巻の変化をこの八句の中に縮約した形で見せるということであり、簡便であることとともに、通常の形式の作品に求められるような興趣をもちこもうというのである。

そして、『西華集』に収めた「この表」、その作品群は、「よのつねの俳諧の手筋」でなく、「言葉をたくみ奇をもとめて今古の姿をえらばず」「曲節おほき」ことをもくろんだもので、同じような作風の作品では、目にたらず、人の心が濁って句意が明確に理解されない。それを避けるために「曲節おほき」作品を掲げたのであって、これは読者や連衆の理解を得ることが第一の目的であって、啓蒙的な意図がうかがわれ、他の理解はどうであれ、新風を掲げるといった態度ではない。この啓蒙性はまた、発句から第三まで解説が付されていることによっても窺知できよう。

「言葉をたくみ、奇をもとめて今古の姿をえらばず」というのは、作風の新旧にかかわらず、目だちやすい表現を用いたということであろう

か。評語に「不易」「流行」の語を用いて発句評をしているが、その不易・流行は、

不易は黄金のむかし今にたふときかことく、流行は羽書とて紙札に物かきて金銀になせるかことし、世にしたかひ時にとりて用ひも用ひすもなりぬへし、いつれかよくいつれかあしからん、世にしたかひたる名なるへし

（東華集）

と説かれている。解説文を例にとって、『西華集』の中からひろうと、

黒崎の沙明の発句

松虫の啼夜は松のにはひ哉 沙明

について、

風情のいさきよきものをたた松のにはひといひなせり。無為所着の所は風雅の本情といふへきか

としているが、松虫の鳴く夜の風情のいさきよい感じを、松のにはひと表現したところが無為所着というのであろうか、松虫と松を結びつけたところ古風の感じを残しているが、これを風雅の本情として見ている。

また一方では、難波の飄竹らとの一座の表合の第三の、

里は焙炉のにはふ門々 天垂

笠きたと笠きぬ人の連立て 支考

について、

其人也、まづは馬買なと見るへし、一句のさきよのつねのつくりにはあらず、此後はいくのことく始もなく終もなきやうにあらんとおもふに此筋は誠に難からん

一箇所「二三目」という、いそがしいスケジュールの行脚であったわけで、広く行脚して、多くの連衆に接するということが、彼の意図したことであったごくであり、そのために、短かく、簡便な形式である表合がえらばれたのであろうか。

『俳諧古今抄』に支考の説くところによれば、儀礼的な俳諧の場合、八句あるいは古式俳諧百韻の表十句を用いることもあったようであるが、同書にはまた、連句形式の説明の中に、しばしば「時宜」をいう。例えば、同書巻五、新製東花式のうち、求韻に句数の事の項に、長歌行、短歌行のことについて、

長短二行は、(中略)第一は求韻の用ながら、短歌には時宜の当用ありなど見えるが、短歌行にあるという時宜の当用というのは、

短歌行は長歌に対する変数なり、表は四句にして裏を八句とし、二の折の表は八句にて其裏を例の四句や、此数も四六廿四にして、先は換韻の用ながら、短からんと思ふ時に一座の一折ならんより物に始終をととなへむか為也

の説明によって知られるように、人数や時間の関係で、長いものができないような場合に、たとえば、長歌行の一折しかできないで完結しないのよりも、短い短歌行で一卷を完結したものを作りあげる、そういう場合には、短歌行という形式は便利であって、これを時宜の当用というものと思われる。

長い行脚の、一つの土地で早卒の間に挨拶的な一座をすますという場合には手ごろな形式であって、後に述べるように、美濃派の宗匠の行脚

#### 『西華集』の編集形態

には、廬元坊里紅の『桃の首途』をはじめとして、多くこの形式がとられている。

表合もまた、右のような意味で時宜によってとりあげられる。

しかし、『西華集』の場合、連衆との一座すべてが表合で統一されており、支考によるこの形式の採用が、必ずしも時宜の当用という、その場その場での判断によるものではなかったと考えられる。所収の表合の一座は、挨拶的な意味がなかったとはいえないにしても、そのみではなかったというべきであろう。『西華集』のあと、ほぼ同じ試みを所をかえてした元禄十三年の『東華集』は、その所収の表合の場所は、近畿東海の、ほとんど旧知の土地であり、『梟日記』の序のあとに附した「餞別の地」に大略一致する。その途次、鳴海でのことは、『知足齋日々記』<sup>註5</sup>の五月十六、十七、十九日の項に次のように見え、

十六日 伊勢支考名古屋東推御越依之はいかい歌仙有彦九九右自分共

十七日 支考東推東福院にて一会有表合二組出来

十九日 支考宮へ昼過かごニテ送ル

表合のほか、それ以前に歌仙を作っている。表合が、挨拶のためのものでないことは勿論である。以上のように、表合は、たしかに形式の簡略という点で、時間的余裕にとばしい折の、挨拶を主眼とした一座に適わしい、時宜の当用であるには相違ないが、『西華集』の場合も、単にそれだけの理由で採用されたものとはいいたいようである。

『西華集』の前文に次の二項があって、同書所収の表合について述べられている。



ならないので、神祇、釈教、旅、無常など、句の内容によって配列することもある。句の配列には、工夫が必要である。

撰集が、発句集と連句あるいは付句集からなり、発句集や付句集が、四季別や神祇、釈教、旅、恋、無常、あるいはすべてを含めて雑とする分類は、連歌の『菟玖波集』以来、『新撰菟玖波集』、『俳諧連歌抄』などを経て、『犬子集』以後の俳書の標準型をなすものであったわけであるが、変化を求めるための工夫がなされて、蕉門の俳書では、例えば『俳諧勸進帳』や『猿蓑』のように、四季の順序をかえたり、『虚栗』や『続猿蓑』に見られるように、連句と発句を混在させたりするようなことも行なわれている。しかし、基本的には、右の伝統的な撰集様式の感覚が保持されていたわけである。

ところで、『西華集』の形態は、右に述べたような伝統的様式とは異ったものである。

連句と発句を収めることは、通常俳書と同じであるが、

① 連句は、表合と称する百韻の表のみ八句。それを、その興行した地域順に配列している。それぞれの表合の発句、脇、第三に解説を附している。

③ 発句は、右の表合群のあとに、やはり地域順に配列されている。発句の作者は、ほぼ表合の連衆のみである。

ということ、

1、表合という連句形式

2、表合の発句、脇、第三の解説

### 3、地域別配列

という三点に、その編集形式上の特色を認めることができるかと思う。

このような形式上の特色は、この時期の支考の俳諧あるいは俳諧活動の性格を何らかの意味で反映するものではなからうか。以下、右の三点を、その観点から考えてみたい。

### 三

表合という連句の形式は、百韻の懷紙の初折表の部分八句のみで完了する短い形式で、「けだし支考の新製<sup>註3</sup>」といわれ、『西華集』が初出かと思われる形式で、続く元禄十二年の『東華集』の行脚でも、『西華集』と同じ形式をとっており、表合という形式による、各地での興行は、この時期の支考の行脚を特色づけるものといっているかと思う。

先ず、もっとも素朴に、短かく、形式の簡便さということが、特色としてあげられよう。支考の、この度の行脚は、『梟日記』によれば、四月二十日に大阪を出発<sup>註4</sup>しているが、六月十五日に伊勢の松木左京・服部九兵衛宛に出した書簡によると、当初八月十日頃に伊勢へ戻る予定であったようで、従って、最初の旅程は、百十日ほどであったらしい。

『西華集』には、十八箇所での、二十六の表合が、収められているが、この書簡には、「行末甘ヶ所斗」と記されており、もっと多くの所を訪ねるつもりであったかもしれない。それが、「此筋世中悪敷鉢子も殊之外に淋しがり申候」という、経済的な事情があったため、省略したのかもしれないが、（もっとも、支考は、発信地日田を小倉とごまかしているので、この予定もかなり水まじりがあるかもしれない。）支考もいうとおり

# 『西華集』の編集形態

石 川 八 朗

## 一

『西華集』は、元禄十一年の、支考の中国・九州行脚の成果の一つであるが、いくつかの点で独自の形態がとられており、同じ行脚の結果として成った日記体の旅行記『梟日記』や、俳論『続五論』のように、その性格が、直ちに理解できるものでもなさそうで、ここで、通常の俳書といささか異にする編集形態について考察を試みようとするのも、『西華集』のごとき形態のとられた意味、支考の意図するところが何であったかを知りたい故にはかならない。

元禄十一年以前に、支考は、大きくまとめると、元禄四、五年の江戸・東北行と、元禄八年、近畿・東海の『笈日記』の旅と、二回の行脚をしているが、前回は、芭蕉に従い、芭蕉の紹介によるものであり、後のは、芭蕉没後、その生前ゆかりの土地をめぐってその遺草を訪ねるという旅であって、いずれも芭蕉を軸として動いてきているが、元禄十一年の行脚は、それらとは異なり、以上のような意味での芭蕉の影がないといってよからうか。支考にとっては新しい、独自の構想のもとに行なわれた行脚ではなかったかということが考えられる。

蕉門俳人の九州への旅行は、元禄八年の路通、元禄十一年の去来、野

『西華集』の編集形態

坡というように、ようやく行わねはじめた時期にあたるが、その旅は、<sup>註1</sup>去来や野坡の場合、俳諧活動を目的としたものでもなかったらしいし、路通の場合を含めて、去来に『旅寐論』の執筆があるほか、撰集として結実することともなかったようである。支考の場合、その行脚は、後に述べるように、十分に意図的であったと思われる。

## 二

元禄十五年刊の、許六と李由の共編になる『宇陀法師』<sup>註2</sup>には、「俳諧撰集法」と題した数項目の文章を録しているが、そこに彼ら蕉門俳人の平均的な撰集のあり方が述べられている。

撰集の組織や句の配列について述べた部分を次に掲げると、

一、巻数の事 上下二冊あれば見ぬ先より発句俳諧と推量せらる（後略）

一、部立の事 年中行事四季景物次第をたつる事、常の事也。発句数すくなく、あるいは二句三句同作にて同じ所にならべざれば、其感すくなくして題を分がたき事ある物なり。其時は神祇尺教旅無常と四季不同に分べき也（後略）

一、集は第一もやう也。四季を分ていつもかわらぬ梅桜月雪、しかもよからぬ句を並べ出せる、不興の事也。一作有べき事也。

すなわち上下二冊ある撰集の場合には、上は発句集、下は連句集であること、発句集は、四季、春夏秋冬に分けた配列になっているのが通常である。

また、発句の配列は、特に心を用い、集の模様をおもしろくしなければ